

第14号

2020年  
6月発行

## CONTENTS

国際コンソーシアムの立ち上げ計画について

国文学研究資料館 館長

ロバートキャンベル……………①～③

AIによるくずし字認識「KuroNet」

ROJFの人文学オープンデータ共同利用センター  
特任助教

カラヌワットタリン……………④～⑤

「偶然記録」の探究へ向けて

総合書物論の開設にあたって

国文学研究資料館 総合研究大学院大学 名誉教授  
谷川 恵一……………⑥～⑦

新日本古典籍総合データベースの文庫情報

国文学研究資料館 特任准教授

宮本祐規子……………⑧～⑨

タグ付けへの誘い

古典籍共同研究事業センター

……………⑩

こんな古典籍があった！

拠点大学古典籍画像紹介

……………⑪

トピックス

……………⑫

## ふみ

「日本語の歴史的典籍の  
国際共同研究ネットワーク  
構築計画」ニユーズレター大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
国文学研究資料館  
古典籍共同研究事業センター

## 国際コンソーシアムの立ち上げ計画について

国文学研究資料館 館長 ロバートキャンベル

国文学研究資料館(以下「国文研」という)では、日本古典籍(十九世紀までの日本で作られた書物)の研究の深化・発展を目的とした国際コンソーシアムの設立準備を進めています。二〇二〇年夏ごろまでに国文研で規約を作り、順次、国内外の機関(学協会を含む)に参加を呼びかけ、同年度内の設立を計画しています。

コンソーシアムとは、複数の機関が、共通の目的のもとで限られた資源を共有し、相互の長所・短所を補完するための任意団体です。日本を対象とした人文学研究に關係する既存のコンソーシアムを挙げると、設立年順に、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(略称:JUC)、日本舞台芸術研究コンソーシ

アム、「国際日本研究」コンソーシアム(事務局:国際日本文化研究センター)等があります。しかし、日本古典籍研究とそれにかかわる人材育成に特化したコンソーシアムは、未だ存在していません。

人文学関連研究費の削減やデジタル化等、研究・教育環境は世界規模で急速に変化しており、一機関が資金・人材・技術等の研究資源を単独で獲得・開発することは年々困難の度を増しています。一方、複数機関が協力をすることで効率化が図れる局面は少なくありません。そこで、大学共同利用機関である国文研が事務局を担当する「日本古典籍研究国際コンソーシアム(仮称)」(以下「国際コンソーシアム」という)を立ち上げ、国内外の大学・研究機関・資料保有機関・

# 国際コンソーシアムの立ち上げ計画について

国文学研究資料館 館長 ロバート キャンベル

学協会に広く参加を呼びかけることとしています。

国文研では、二〇一四年度以来、大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（以下「NW事業」という）を通して、国内の二十拠点大学、及びその他の国内外の大学・研究機関・資料保有機関・学協会等、実に五十機関以上から成る研究ネットワークを構築してきました。このNW事業の大きな成果である新日本古典籍総合データベースを基盤として国際コンソーシアムを設立できれば、二〇二三年度のNW事業終了後も、世界的な日本古典籍研究および人材育成の輪が絶えることなく、更に拡充されていくことでしよう。

二〇一九年十一月十五日、国文研を会場に、NW事業の一環として開催された第五回日本語の歴史的典籍国際研究集会では、「ラウンドテーブル・コンソーシアム構築に向けて」と題して、国内外の大学・研究機関の研究者の方々と意見交換を行いました。あらためて確認できたことは、国文研に研究のハブ（中心的拠点）としての役割が求められていること、そして国文研がコンソーシアムを立ち上げる際には、国文研の特性を活かし、日本古典籍の保存・研究・活用に重点を置くことが期待されていることでした。また、国内外に共通する喫緊の課題として浮かび上がってきたのは、後継人材の育成です。ここでいう人材には、教育・研究機関の教員・研究員・学生のみならず、司書・学芸員・アーキビスト等、専門職員の立場で研究に携わる方も含まれます。さらに、世界各地で誰がどのような研究に取り組んでいるかについての情報が、十分に見える形に

なっていない、との指摘も出されました。

国際コンソーシアムでは、機関同士の連携という形をとることで、個人の人脈や影響力に依存しない、開かれた研究者・専門職員のネットワークを構築したいと考えています。ここでいう機関には、大学の「学科」・「専攻」、研究・資料保有機関の「部」・「課」等や、学会・協会が含まれます。各機関には、事務局（国文研）が用意する規約に同意し、窓口担当者のメールアドレスを連絡用に提供いただくことその他には、何の義務も発生せず、参加費用も請求しません。同時に、事務局が一方的に資金を用意することはありません。国際コンソーシアムを媒介に、各機関が特定の目的、プロジェクト、イベントごとに、様々な研究資源（資金、人材、技術、教材、ノウハウ等）を共有できる場を皆で作りに上げていきたいと考えています。国文研も一参加機関として、国際コンソーシアムを通して、研究費を含む様々な資源の共有を積極的に図っていく所存です。

国際コンソーシアムの主要な目的として掲げたいのは、日本古典籍研究を対象とした(1)人材(学生・研究者・専門職員)の育成、(2)先端的なおよび研究成果発表のための資源・情報の共有、(3)データベースの活用等に関する情報共有の三点になります。期待できる効果として挙げられるのは、専門的な研究手法や知識を修得できる機会へのアクセス改善、教材(動画も含む)の共有や共同開発、授業の共同開設による単位認定や共同指導の可能性の模索、研究費の拠出、共同研究の促進、学会パネルの組成、イベントの共同企画、学会・学術誌の活性化、デジタルデータの活用に関する

る意見交換や技術の共有、国・地域を超えた実績評価指標の検討と提言等になると思われます。

以上の目的のもとに、これらの効果を実現するため、国文研は事務局として、(イ)国際コンソーシアム専用ウェブサイトの新設・構築・維持、(ロ)オンライン研究会の連絡調整、(ハ)オンライン情報交換会の連絡調整、の三点を中心に行っていくことを考えています。

以下は現段階での構想、案としてお読みください。

ウェブサイトは、日本古典籍研究に関する情報を共有・集積できる場として構築します。コンテンツは、(A)参加機関の取り組みと保有資料等の紹介、(B)国内外の学会、各種イベント、研究会、資料調査の機会等の告知、(C)世界各地の研究者(大学院生を含む)と専門職員の短いプロフィールとリサーチマップやAcademia.edu等へのリンクを載せた「研究者・専門職員ディレクトリ」、(D)研究の手引きや教材等を共同で執筆・編集するための「日本古典籍研究Wiki」を考えています。(A)・(B)には参加機関から提供された情報を優先して掲載していくこととなりますが、(C)・(D)には希望する個人なら誰でも入力・参加できるようにしていきたいと考えています。

オンライン研究会は、参加機関に所属する個人が、日本古典籍研究に関連する任意のテーマで研究会を立ち上げ、インターネット会議ソフト(Zoom等)を用いてオンライン開催するというものです。国際コンソーシアムのウェブサイト上で告知するので、時差の

問題はありますが、世界中から参加者を募ることができます。注釈を中心とした輪読、デジタル人文学の技術開発に特化した研究会、図書館の司書を主な対象とした研究会等、様々な可能性が考えられます。オンライン研究会を基盤に、研究の深化、人材育成の促進に加え、所属や地域の垣根を超えた研究資源の共有、学会パネルの組成等も実現されれば大変喜ばしいことだと思います。

参加機関同士の情報共有は、メールが主となりますが、年に数回、オンライン情報交換会を開催し、参加機関の窓口担当者が自由に対話し、情報共有できる場を設けることも考えています。また、希望する参加機関が、特定のテーマに絞った単発のオンライン情報交換会の開催を呼び掛けられるようにもするつもりです。テーマ例は、人文学研究の評価基準の国際比較、新日本古典籍総合データベースに関する意見交換等になるでしょうか。これらの会についてもウェブサイト上で告知し、参加機関以外の機関や個人もオプザーバーとして参加できるようにしたいと思います。

ここに記したことは現段階での構想で、まだまだ課題も多いと思いますが、国内外の皆様からのご意見を取り入れながら、柔軟に実行に移していきたいと考えます。今後、規約や参加方法等も含め、本年夏ごろに公開を予定している国際コンソーシアム専用ウェブサイトにおいて情報を発信していきます(ウェブサイトの立ち上げについては当館HP等でご確認ください)。ご意見をお寄せいただければ幸いです。

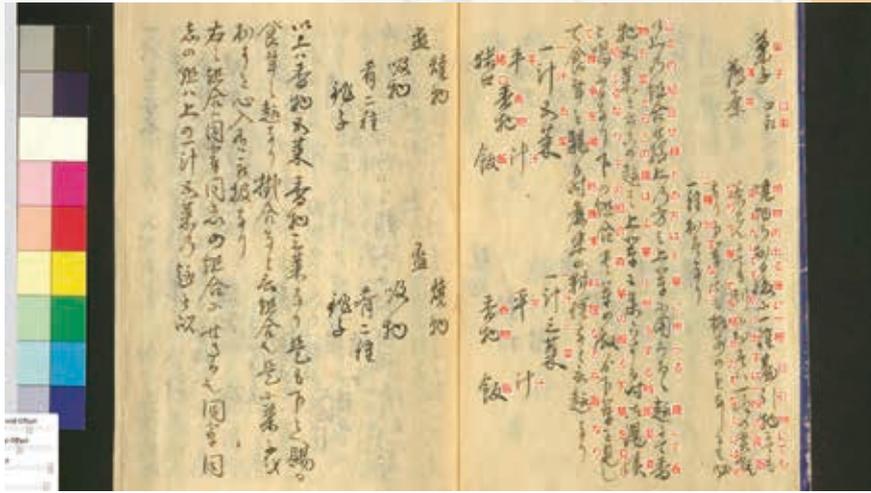
【研究開発系共同研究】

# AIによるくずし字認識「KuroNet」

ROIS/DS 人文学オープンデータ共同利用センター

特任助教

カラーヌワットタリン  
(Tarin Clannwat)



KuroNet くずし字認識結果『膳部料理抄』国文学研究資料館所蔵

印刷文書や本などを  
スキャンしてデジタル  
化した画像を機械に入  
力すると、そこに書い  
てある文字を自動的に  
読み取りテキストとし  
て出力するソフトウェ  
アのことを、一般にO  
C R (Optical Character  
Recognition: 光学式文  
字認識)と呼ぶ。現代の  
文字に対するOCRソ  
フトウェアはいくつも  
開発されているが、く  
ずし字のためのOCR  
ソフトウェアはほとん  
ど存在しない。手書き  
文字、あるいは手書き

文字に近い木版印刷文字は現代の印刷文字よりもはるかに認識が  
難しく、最近まで十分な認識精度が得られなかったためである。「人工知  
しかしその状況を変えたのがAI(人工知能)である。「人工知

能」は、英語では「Artificial Intelligence」と呼ばれ、学習、推論、認  
識、判断など、人間の脳のはたらきを機械によって実現するための  
理論や手法を研究する分野である。そして「機械学習」とは、デー  
タから機械に学習させるための理論や特定の問題解決への応用など  
を研究する、AIの一分野である。機械学習の技術が急速に発展す  
るとともに、データセットの規模も大規模化したため、数年前なら  
困難とみなされていた問題が実用的に解決できるようになった。  
その一例がくずし字認識である。国文学研究資料館が作成した  
データセット「日本古典籍くずし字データセット」の公開によっ  
て、くずし字認識の研究は最新の機械学習技術を取り入れて大き  
く進展することとなった。

KuroNetくずし字認識で用いる機械学習の手法を以下に簡単に  
説明する。KuroNetはくずし字データセットの文字画像の特徴を  
学習する。そこで用いるのが物体検出(object detection)技術、す  
なわち与えられた画像中に存在する物体を検出する方法である。  
AIによる物体検出技術は応用範囲が広く、近年は研究が非常に  
活発化している。例えば自動運転では、カメラの視界に入る他の車  
両や歩行者、標識などを自動的に認識するのが物体検出技術の役  
割である。KuroNetは同様に、画像中に存在する文字を直接探し出  
すことができる。人文学オープンデータ共同利用センター  
(CODH)がWebに公開したKuroNetくずし字認識サービスは、

IIIF (International Image Interoperability Framework) に準拠した画像であれば、世界のどこの図書館やミュージアムが提供する画像に対してでもくずし字認識を適用できるようになっている。

KuroNetはくずし字認識分野において画期的な手法であるが、どの資料でも高精度で認識できるわけではない。一般にAIは学習したことのないデータを認識することはできず、KuroNetも同様にくずし字データセットに入っていない文字は認識できない。くずし字データセットは四十四点の近世書籍から作成されており、四十一点は版本で三点は写本である。そのため、例えば変体仮名の場合、近世によく使われていた字母でなければKuroNetは平仮名として認識できない。また手書き文字のデータがまだ少ないため、古文書の認識は困難である。KuroNetの改良に最も重要な課題は「データを増やすこと」である。

KuroNetが学習するデータは、画像中のどこに何の文字があるのかというデータである。そのためには、翻刻テキストと画像のペ



文字の座標情報を自動的に推定したKaggle優勝モデル「源氏物語歌合絵巻」国文学研究資料館所蔵

アだけでなく、個々の文字ごとの座標情報が必要である。この作業を人力でやるのが大変という点だが、データセットを拡大する上で一つの問題となっていた。しかし二〇一九年にCODH、情報研、国文研が主催したKaggle Kuzushiji Recognitionコンペで優勝した手法などを使うと、この作業を大幅に軽減できる可能性が見えてきた。このモデルを利用することで、翻刻テキストと画像だけでなく、KuroNet用の学習データを作成したいと考えている。

最後にKuroNetの今後の展望を述べたい。第一に「KuroNetによってくずし字の読めない一般の方々がかくずし字資料を利用する際のハードルが下がるため、くずし字で書かれた古典文学などに興味を持って古文や漢文の勉強を始める学生が増えることが期待できる。第二に、稿者の当初からの研究目標として、未翻刻のくずし字資料の語彙検索システムを実現したい。こうしたシステムができれば、資料の管理、検索などが効率的となり、資料の保存にもつながることが期待できる。



KuroNetのくずし字認識結果「宇津保物語」国文学研究資料館所蔵

〔機構内連携共同研究〕

## 「偶然記録」の探究へ向けて

### 総合書物論の開設にあたって

書物には、その本が著述されたそもそもの目的やその本が属するジャンルを越えた、さまざまな人間の営みや生活がたたま込まれている。たとえば日本文学のジャンルに属する『万葉集』は和歌集であるが、収められた歌には二百近くの植物が詠まれ、その中にはどのような植物なのか同定が困難なものが数多く含まれていて、現在も科学史家たちによる研究が続けられている。文学作品や絵画に描かれた住まいについても同様で、住居の構造を記録しておくことが作品の目的でないばかりでも、そこからある時代の人びとが生活した家屋がどのようなものであったかを読み取ることができる。

書物や記録がもつこうした後世へ情報を伝えるはたらきを柳田国男は「計画記録」と「偶然記録」という呼び方で区別し、「文字を筆者の計画した以外の問題を明らかにするため援用する」「偶然記録」の利用を推奨している（『郷土研究と文書史料』、『郷土生活の研究法』一九三五年）。たとえば『道中膝栗毛』を用いて「馬方の道義観念」という問題を明らかにすることを柳田が例としてあげているように、あらゆるテキストや図像には「偶然記録」が含まれている。それは、科学史や建築史といったすでにある研究分野にとつての「偶然記録」であるばかりでなく、まだ出現していない分野の「偶然記録」でもある。

かつて中国の沿岸を脅かした倭寇の事蹟に取材した小説を書く

うとした幸田露伴は、『和漢船用集』をはじめ、さまざまな「雑書」から海上での人々の営みに関したことを拾い集め、その語義を添えた備忘録を作成した。結局この小説は書かれなかったが、露伴がこしらえた備忘録は『水上語彙』と題して一八九七年に刊行されている。アイウエオ順にことを掲出した『水上語彙』は、アで始まる語だけでも八十余りの、『言海』などの辞書類には載らないことを収めていた。この本を見て発奮した柳田が四十年ほど後に『分類漁村語彙』をまとめていることからすると、「偶然記録」を活用するという柳田の発想そのものも、露伴の試みにその端緒があるといつていいのかもしれない。

『水上語彙』は、露伴全集とは別に、露伴の遺稿集である『露伴蝸牛庵語彙』（一九五六年）に収められたが、その後記で土橋利彦は、「辞書」と題した一八九五年の露伴の文章を引いている。

吾が邦に元来辞書少し。近き頃や、体裁を具へたるものも出でぬにはあらざれど、要するに「書物より造りし書物」に過ぎず。源氏狭衣の中に死語を索めなば直ちに得んも、日常用ひ居れる語は或は洩れたり。例へば、乗合の京の奴、かきたつより顔さし出し、と近松の書きたる其かきたつとは如何なる義か、（…）言海などに就きて其語を索むるに、其語の影だにあること無し。（…）卒然として今の謂はゆる辞書に臨む時は、如何に著者等が古文学乃至本草学等に忠実なるに比しては、如何に

国文学研究資料館  
総合研究大学院大学  
名誉教授  
谷川 恵一  
たにかわ  
けいいち

工業農業等に対して冷淡不信実なることよと感ぜざるを得ず。これ全く辞書の作者の罪にはあらず、古来の風潮のこれをして然らしめしのみにはあれど、如何にも口惜しきことにはあらずや。今の辞書を以て日本を觀んには、恰も日本には工業商業農業等は殆んど無かりしものと云ふを得べきなり。

近松門左衛門の作品の一節「かきたつより顔さし出し」の「かきたつ」を『水上語彙』は「舟の左右に立つ垣」と説いているが、こうした「工業商業農業等」民衆の日常に用いられたことばは、江戸期に進展した国文学（「古文学」）や博物学（「本草学」）などの成果の上に立った『言海』には採られていない。露伴が「書物より造りし書物」といって『言海』を批判するのは、源氏物語や狭衣物語などの江戸期以来の学問の対象となってきた「書物」ばかりに目を向けていることをいっているのであって、「雑書」も「書物」に数えていいのであれば、『水上語彙』もまた「書物より造りし書物」であるには違いなかった。露伴を助けて『水上語彙』の作成に携わった石井研堂の書き入れのある『水上語彙』が長崎大学の武藤文庫に残っていて、そこには、出版に際して省かれた一々の出典を記した『水上語彙』の稿本を研堂が所持していると記されている（国文研：近代書誌・近代画像データベース）。

本から本をつくるという簡単なようだが、露伴の博識と、のちに『漂流奇談全集』（一九〇八年）・『異国漂流奇譚集』（一九二七年）としてまとめられる漂流記の調査研究を続けていた研堂の篤学との稀有な結びつきによってなったのが『水上語彙』であって、誰にでもできる芸当ではないことはもちろんだ。ただ、漂流を扱った写本の探索におびただしい労力を費やさなくてはならなかった研堂の時代にくらべ、研究の環境は劇的に変化した。残された膨大な書

物を対象として、それらを「偶然記録」として活用し、人文学をより豊かなものにしていくための試みを開始する条件は揃っている。柳田も述べているように、ある時代に当たり前であったことをその時代に属する人びとはわざわざ書き残したりしない。「偶然記録」を手がかりにしてそれらを明らかにするにはどのような手続きや方法が必要となるのか。歴史的典籍NW事業の一環として人間文化研究機構で実施している共同研究「異分野融合による総合書物学の構築」の成果を踏まえ、総合研究大学院大学の文化科学研究科の共通科目として今秋から新たに開講される「総合書物論」は、個別の研究分野を越えた取り組みから学んでいく。

# 新日本古典籍総合データベースの文庫情報

国文学研究資料館

特任准教授

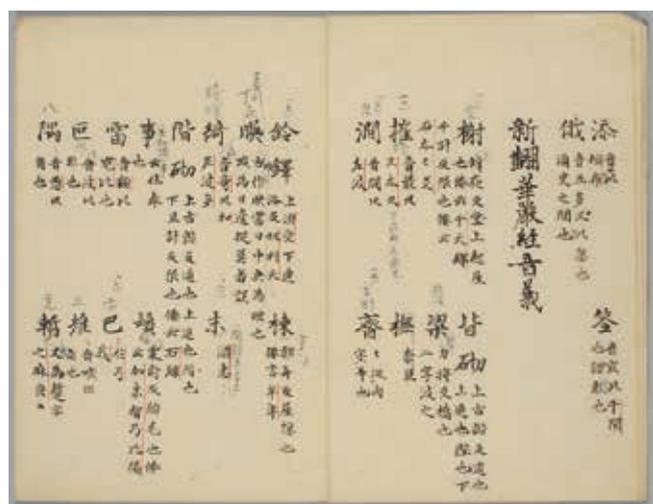
宮本 みやもと

祐規子 ゆうきこ

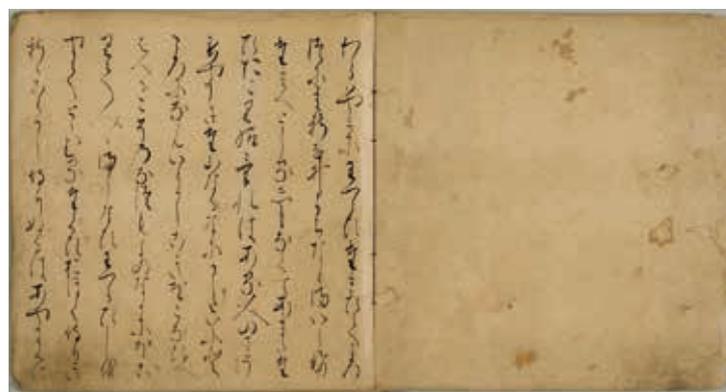
本稿では、歴史的典籍NW事業に関連する国文学研究資料館所蔵のコレクションを紹介したい。紹介したコレクションは、当館「新日本古典籍総合データベース」で、利用条件CC BY-SAにて公開されている。また、今回紹介するコレクションの一部は、今年度内に、国文研とCODH(<http://codh.rois.ac.jp/pn/j/>)で、データセット公開も予定される。是非ご利用いただきたい。

## ・橋本進吉旧蔵書（文庫番号八八、点数三三、略称国文研橋本）

橋本進吉（一八八二～一九四五）の旧蔵書コレクション。橋本は、東京帝国大学を卒業後、同大教授となった国語学者。国語学会初代会長も務めた。研究対象は非常に幅広いが、橋本文法として知られる文法学説や、音韻史が特に著名。



橋本進吉自筆写本『新翻華嚴経音義』国文学研究資料館所蔵  
書誌ID: 200021027、DOI: 10.20730/200021027  
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200021027/viewer/4>



『源氏物語』国文学研究資料館所蔵  
書誌ID: 200025625、DOI: 10.20730/200025625

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200025625/viewer/4>



<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200025625/viewer/1>

譲渡されたコレクションには、『下官集』の伝本類、『仮名文字遣』の古写本、橋本本と呼ばれる『源氏物語』鎌倉期写本、橋本進吉自筆の写本類などがある。例えば『下官集』の伝本類には、正平十二年写の現存最古写本である「倭歌作法」、現存最善本として評価される定家自筆本の模刻版『定家卿書式』、所在不明であった嘉禎四年奥書本も含まれる。点数は多くないが、国語学・国文学研究において重要なコレクションといえる。

・日本漢詩文集コレクション(文庫番号八七、点数八三一、略称国文研日本漢詩文)

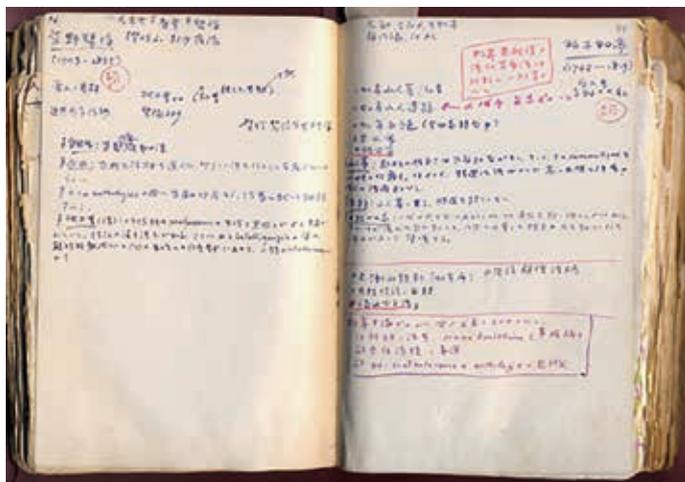
詩人、小説家、評論家の中村真一郎(一九一八〜一九九七)旧蔵の江戸期から昭和にいたる漢詩文集のコレクション。中村は、東京大学仏文科卒業後、文学研究グループ「マチネ・ポエティク」を結成し定型押韻詩を試みた後、長編小説を執筆し、戦後派作家としての位置を確立した。また江戸時代の漢詩を版本で読み込み、その結実である『頼山陽とその時代』(芸術選奨文部大臣賞)、『蠣崎波響の生涯』(読売文学賞受賞)、『木村兼葭堂のサロン』の三作があり、『木村兼葭堂のサロン』が絶筆となった。

本コレクションは、服部南郭、菅茶山、頼春水、中島棕隠、柏木如



中村真一郎旧蔵の江戸漢詩文コレクション

亭、大沼枕山といった江戸時代の漢詩人たちの多種多様な著作が、版本中心に数多く収集される。詳細については『中村真一郎江戸漢詩文コレクション』(国文学研究資料館普及連携活動事業部編、二〇〇七年刊)を参照されたい。



中村自筆「江戸漢詩に関する創作ノート」



『山陽遺稿』国文学研究資料館所蔵  
書誌ID:200012583、DOI:10.20730/200012583  
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200012583/viewer/2>

また、本コレクションが当館に収蔵された後、中村自筆「江戸漢詩に関する創作ノート」も、夫人である佐岐えりぬ氏から、関連資料として寄贈されている。このノートは、江戸時代の漢詩人を年代順に並べ、一頁につき一人ずつ(二百頁)、詳細に記載されたもの。このノートを基に、中村の漢詩関連著作は生み出された。近代における古典文学享受の様相を考える上で、重要な資料といえよう。

# タグ付けへの誘い こころな

新日本古典籍総合データベースでは、画像検索機能の高度化を目指し、書名や著者名といった書誌情報に基づく検索のほかに、画像に付されたタグ(キーワード)による検索機能を導入しています。

国文研が進める本ネットワーク事業では、三〇万点の画像提供を目指していますが、その五パーセントに当たる一万五千点にタグ付けすることを本事業計画当初より目標としており、令和二年三月末現在で、六千二百点余の古典籍に対し、四十九万五千のタグが付されているのです。

現在、データベースに搭載されている典籍画像にタグを付す作業を行っているのは国文研教員、データベース高度化専門員、院生等を含む外部協力者になります。国文研教員は自らの専門に応じ、また、高度化専門員は医学、数学分野の研究者が中心となって、それぞれ専門用語、特殊用語にタグ付けを行っています。また、院生等を含む外部協力者には主に見出しタグを付けてもらっています。さらに、大学教育の一環として、教員の指導の下で、学生の皆さんにタグを付けてもらう取組が試験的に始められ、これらの取組により令和元年度には四千点を超える古典籍に十六万弱のタグが付されました。

こうして付けられたタグによる検索は、一か月当たり千百件を越え、利用者の便となっていることが見て取れます。

デジタル画像に機能的なタグを付けることは、多様な分野の研究者、利用者の便を図るために重要です。国文学専門の研究者等の場合は書誌検索が主流になりますが、異分野の研究者や一般利用

者の場合は、探したい画像が特定されていないことが多く、膨大なデータベース上ではどこを探してよいのか分からない場合が多いのです。そうした場合に有効なのがタグ検索です。「干支」や「津波」、「料理」、「地名」などの情報が、どの古典籍に記載されているのかタグで検索すれば検索の省力化につながります。さらに検索結果画面では古典籍に描かれた絵を直接みることもでき、例えば「武士」で検索すると武士の服装、髪型なども確認できます。また、タグが付いていることで、一般的に顧みられることが少ない古典籍が検索され、新たな発見に繋がることも期待できます。

国文研では、現在タグ付けに協力いただける方を募集しています。古典籍に関し専門的知識を有しタグ付けに協力してみたいとお思いの方は、古典籍共同研究事業センターデータベース第二係 center\_db@nii.ac.jp までご連絡いただければ幸いです。

## 古典籍共同研究事業センター



タグ付け(「神奈川砂子」国文研蔵)

※01 序
※02 凡例
※03 索引
※04 解説
※05 解説の巻
※06 室中松 干支一室中
※07 子室中
※08 入江川橋 一之室
※09 新室中
※10 西邊寺通山境
※11 神奈川橋
※12 神奈川砂子 二
※13 神奈川橋
※14 神奈川 方角

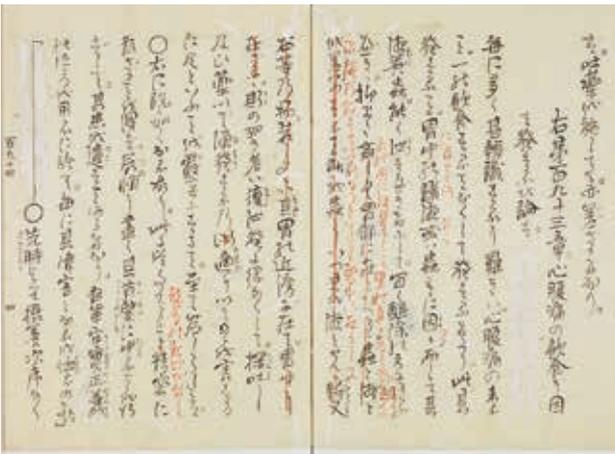
# こんな古典籍があった！～拠点大学古典籍画像紹介～第6回

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各大学おすすめの一点をご紹介します。

●東北大学附属図書館所蔵『西説内科撰要(せいせつないかせん よう)』巻十二 ヨハネス・デ・ゴルテル著、宇田川晋(うだがわしん)・槐園(かいはん)・玄随(げんずい) 訳

DOI: <https://doi.org/10.20730/100270340>

『解体新書』(一七七四)に代表されるように、西洋医学書の翻訳では外科が先行していたが、本資料は初の西洋内科書の翻訳であり、当時の内科医に大きな影響を与えたことになった。全十八巻で寛政四年(一七九二)から文化七年(一八一〇)にかけて刊行されたとされている。原著はオランダのゴルテル(Johannes de Gorter)の『Gezuiverde Geneeskunst of Kort Onderwys der Meeste Inwendige Ziekten』(一七四七)である。本資料は東北大学附属図書館の狩野文庫所収で、第十二巻の稿本とされており、朱字による加筆や胡粉による修正の跡が残されている。

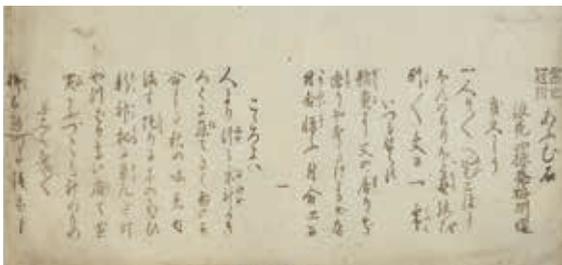


(該当部分を見る: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100270340/viewer/35>)

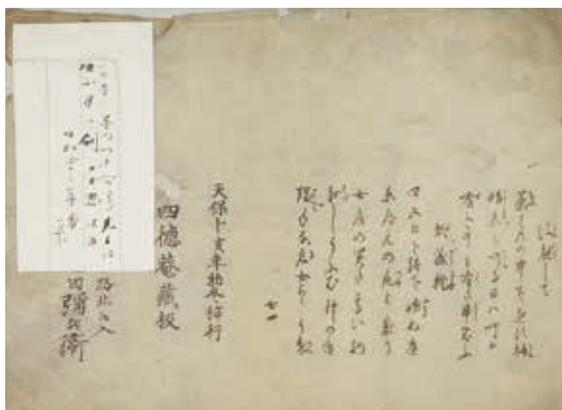
●関西大学総合図書館所蔵『當世冠附あふむ石(とうせいいかむり づけおむせき)』四徳菴(よしくあん)・梅州(うめしゅう)蔵板、京都笹田彌兵衛(ささたなやへゑ)、天保一〇年

DOI: <https://doi.org/10.20730/100302577>

元禄頃から始まったとされる「冠付」は、五字の題に十二字の発句を付ける雑俳のひとつで、江戸時代を通じて多くの冠付句集が編纂された。この書は、近世文学の泰斗中村幸彦(ゆきひこ)氏の旧蔵書で、最終丁に「この書の墨の付き方より見るに校正用の刷かと思わる。昭和42年春 葉(中村氏)の号は菜色子」との貼紙がある。製本されず未裁断のまま、印刷も薄くなっている部分がある。関西大学が所蔵する別の版と比較すると、書肆(しよし)の部分埋木されており、版木のやり取りされた様子が判る。



(該当部分を見る: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100302577/viewer/5>)



(該当部分を見る: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100302577/viewer/64>)

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html>)を必ずご確認ください。

## イベント開催予定

■第六回日本語の歴史的典籍国際研究集会

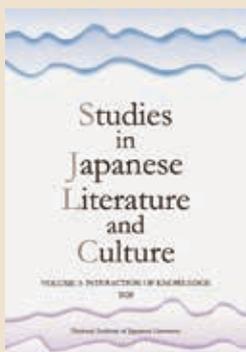
〔開催日〕二〇二〇年十一月七日(土)

〔会場〕国文学研究資料館大会議室

COVID-19の流行による影響も想定されませんが、現在、右日程で開催予定です。今後の開催の有無、プログラムの詳細情報等は、ホームページに掲載いたします。

## 英文オンライン・ジャーナル第三号刊行

Studies in Japanese Literature and Culture の第三号「Volume 3: INTERACTION OF KNOWLEDGE」を歴史的典籍NW事業のウェブサイトから三月末に刊行しました。



<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sjlc.html>

右記URLから全冊がダウンロード可能です。個別論文のみダウンロードする場合は、各論文のPDFアイコンをクリックしてダウンロードできます。

## 歴史的典籍累計十四万八千点を撮影

当事業センターは、令和二年三月末現在で、歴史的典籍十四万八千点の画像(累計)を撮影いたしました。

今後、毎年二万八千点の撮影を進め、三十万点の画像公開を目指します。

撮影された画像は「新日本古典籍総合データベース」において順次公開する予定です。

<https://kotensekinijl.ac.jp/>



## 『国書総目録』のPDF版をデジタル公開

江戸時代以前の書籍の総合目録として基本的かつ網羅性の高い『国書総目録』の著作権を版元である岩波書店より譲渡され、四月三日(金)より電子版を「新日本古典籍総合データベース」から公開しました。

<https://kotensekinijl.ac.jp/page/kokusho.html>

## イベント報告

■一月十七日(金)、シンポジウム「デジタル知識基盤におけるパブリックドメイン資料の利用条件をめぐって」において、「新日本古典籍総合データベース」におけるデジタル画像の利用条件」と題し発表を行いました。また、「新日本古典籍総合データベース」のデモなどのブースを出展しました。



■二月四日(火)、当館大会議室において、国立極地研究所との共同研究の成果として、第四回古典籍文理融合研究会を開催しました。

■二月七日(金)、当館において、歴史的典籍国際共同研究の成果として、「古典芸能における身体」ととばと絵画から立ち上がるもの」中間研究発表会を開催しました。

■二月八日(土)、当館オリエンテーション室において、共同研究の成果として、シンポジウム「文学と化学分析から見た、日本の食文化における断絶と継承—古代、江戸から現代まで—」を開催しました。

## ふみ 第15号は、

令和3(2021)年

1月発行予定です。

■表題の背景色は江戸紫(えどむらさき)です。江戸時代、武蔵野に自生するムラサキ草を使い江戸で染めました。赤みの強い京紫に対して青みが強いのが特徴です。歌舞伎の「助六」で主人公が江戸紫色の鉢巻きを着用しています。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の『方丈記』(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

## ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター第14号

〈発行日〉令和2(2020)年6月30日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

T 190-0014

東京都立川市緑町十一三

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>



井原西鶴『好色一代男』がご覧いただけます。携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。